

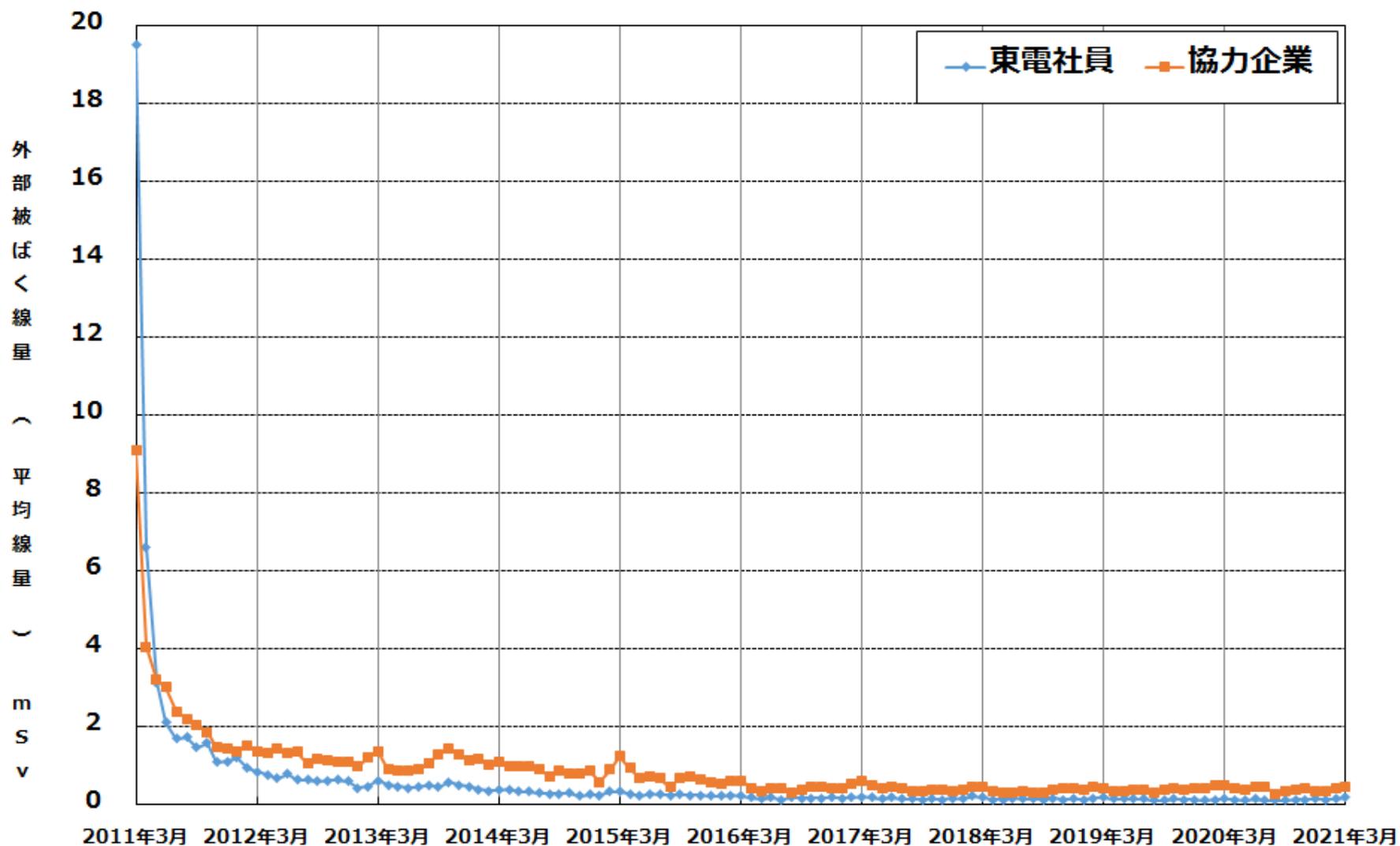
# 福島第一原子力発電所 従事者の被ばく線量全体概況について

2021年6月14日

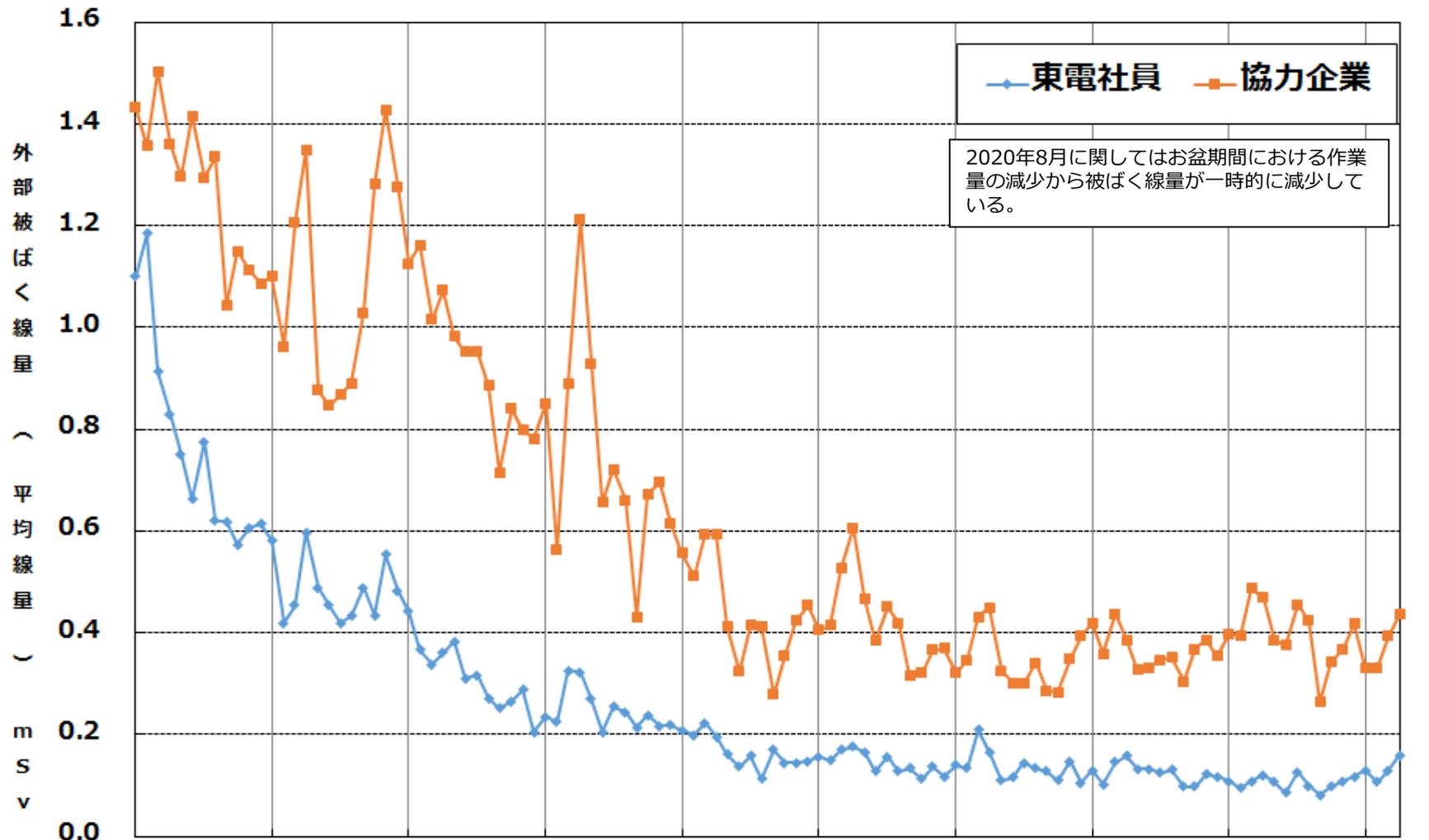
---

東京電力ホールディングス株式会社

# ①発災以降の月別外部被ばく線量の低減状況（月平均線量）



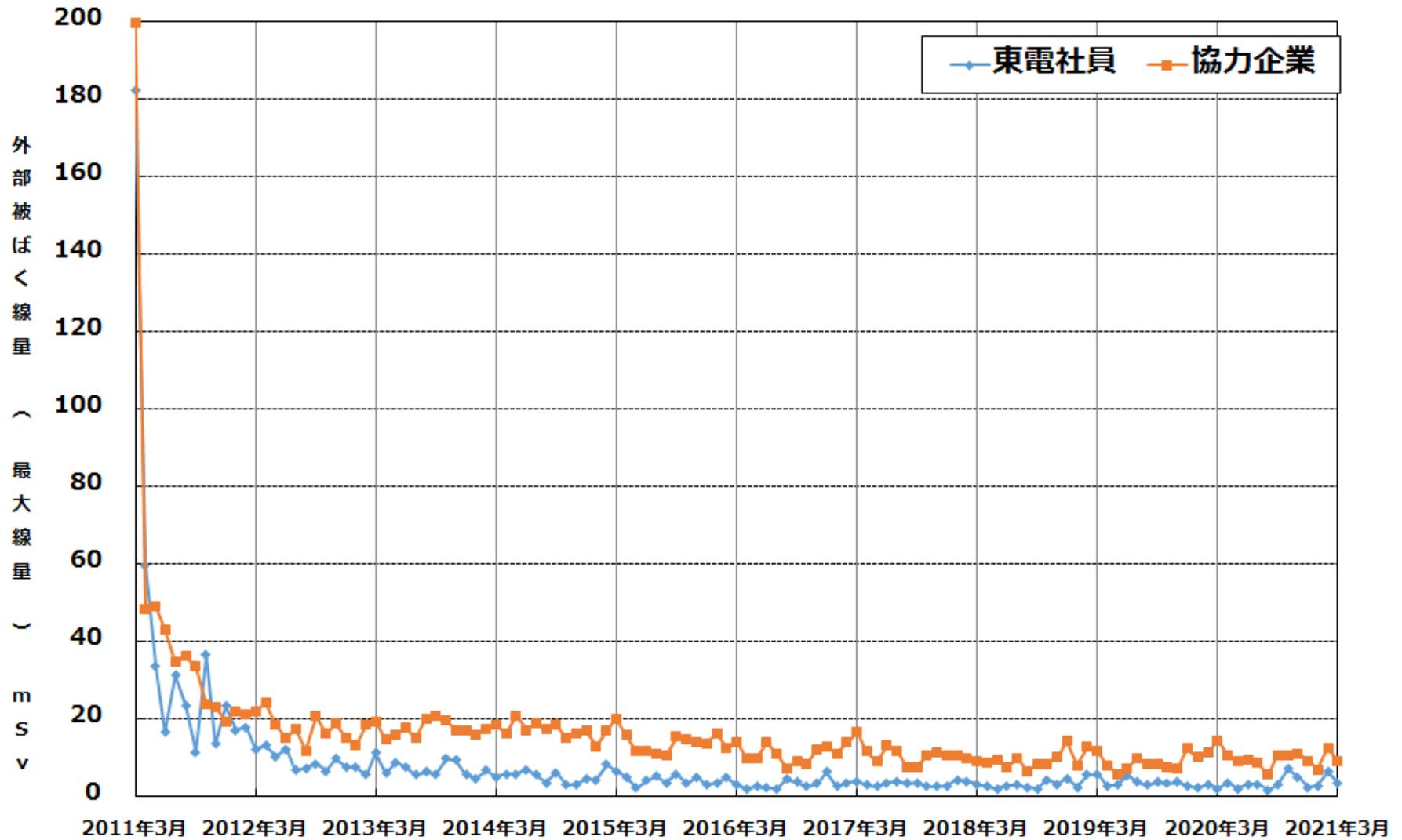
## ②2011年12月以降の外部被ばく線量推移（月平均線量）



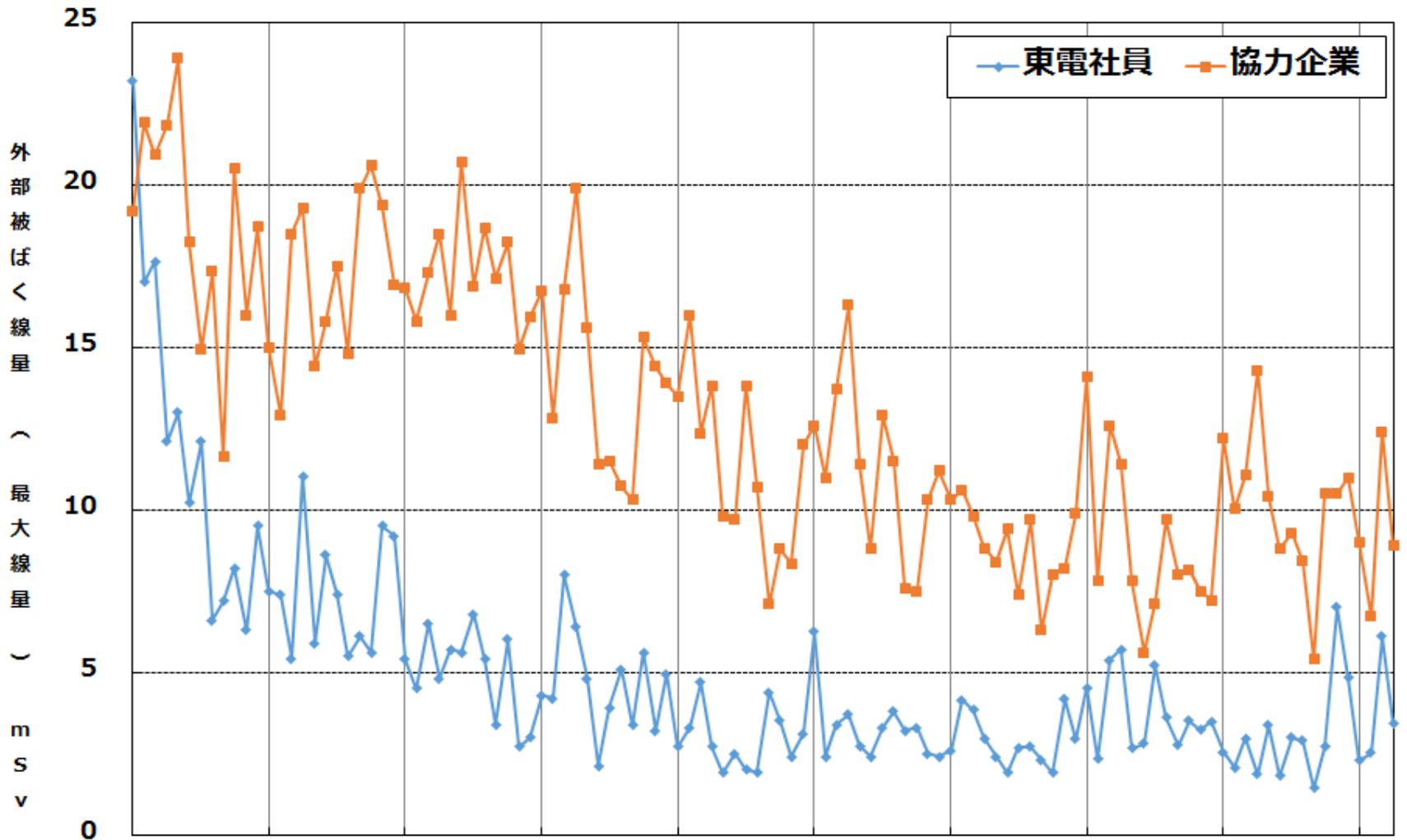
2011年12月 2012年12月 2013年12月 2014年12月 2015年12月 2016年12月 2017年12月 2018年12月 2019年12月 2020年12月

※ 2011年12月（ステップⅡ）以降

### ③発災以降の月別外部被ばく線量の低減状況（月最大線量）



# ④2011年12月以降の外部被ばく線量推移（月最大線量）



2011年12月 2012年12月 2013年12月 2014年12月 2015年12月 2016年12月 2017年12月 2018年12月 2019年12月 2020年12月

※ 2011年12月（ステップⅡ）以降



## ⑤放射線業務従事者の累積外部被ばく線量 2020年度分

区分(mSv)	2020.4月～2021.3月		
	東電社員	協力企業	計
100超え	0	0	0
75超え～100以下	0	0	0
50超え～75以下	0	0	0
20超え～50以下	0	0	0
10超え～20以下	12	926	938
5超え～10以下	62	854	916
1超え～5以下	232	2,319	2,551
1以下	1,031	4,883	5,914
計	1,337	8,982	10,319
最大(mSv)	14.83	19.31	19.31
平均(mSv)	0.97	2.84	2.60

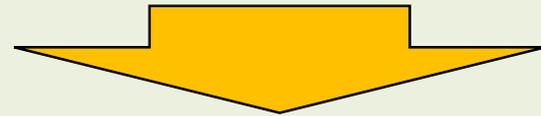
○2020年度（2020.4月～2021.3月）に作業実績のある

10,319名のうち

10,319名（100%）は50mSv以下

10,319名（100%）は20mSv以下

8,465名（82.0%）は5mSv以下



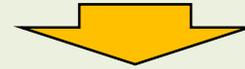
○全ての作業者について被ばく線量は線量限度内(50mSv/年)で管理。

○2011.10月以降、有意な内部取り込みは認められていない。

## ⑥2016年4月1日を始期とする5年間の累積外部被ばく線量

区分(mSv)	2016.4月～2021.3月		
	東電社員	協力企業	計
100超え	0	0	0
75超え～100以下	0	59	59
50超え～75以下	2	350	352
20超え～50以下	90	2,050	2,140
10超え～20以下	159	2,451	2,610
5超え～10以下	201	2,531	2,732
1超え～5以下	615	4,782	5,397
1以下	1,389	10,345	11,734
計	2,456	22,568	25,024
最大(mSv)	59.73	88.62	88.62
平均(mSv)	3.28	6.96	6.60

- 2016.4～2021.3に作業実績のある25,024名のうち  
25,024名(100%)は100mSv以下  
24,613名(98.4%)は50mSv以下  
22,473名(89.8%)は20mSv以下



- 全ての作業者の被ばく線量については、100mSv/5年の線量限度を超えないよう、発電所では80mSv/5年の管理をしている。
- 75mSvを超過した59名の内2名は、2021年3月31日時点で作業終了に伴い、従事者登録を解除した。

残りの57名は、低線量エリアでの作業や、現場出向を制限する等の措置を講じ、線量限度を超えない管理を実施した。

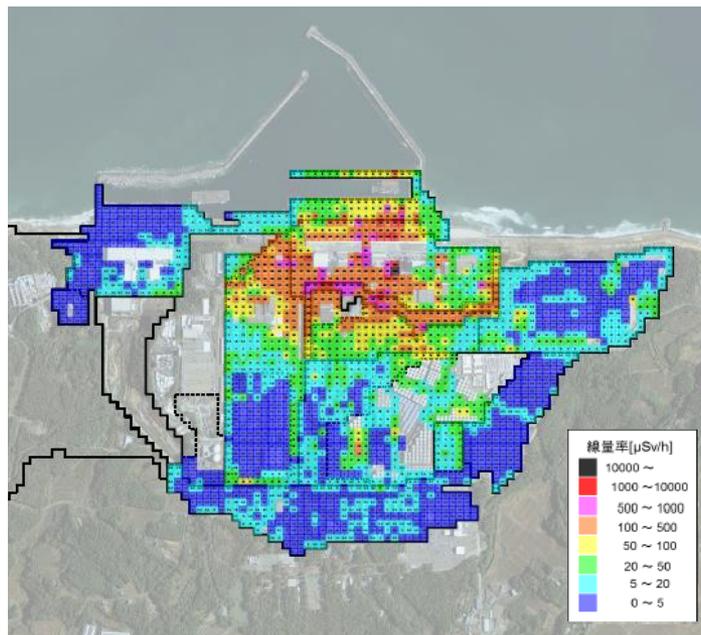
なお、80mSv/5年を超えるおそれがある場合は、個人毎に年度末までの線量管理計画を立案し、線量限度を超えない管理を実施した。

- 75mSvを超過していない作業者についても、毎月累積外部被ばく線量を確認し、線量限度を超えない管理を実施している。

## ⑦環境線量率の低下

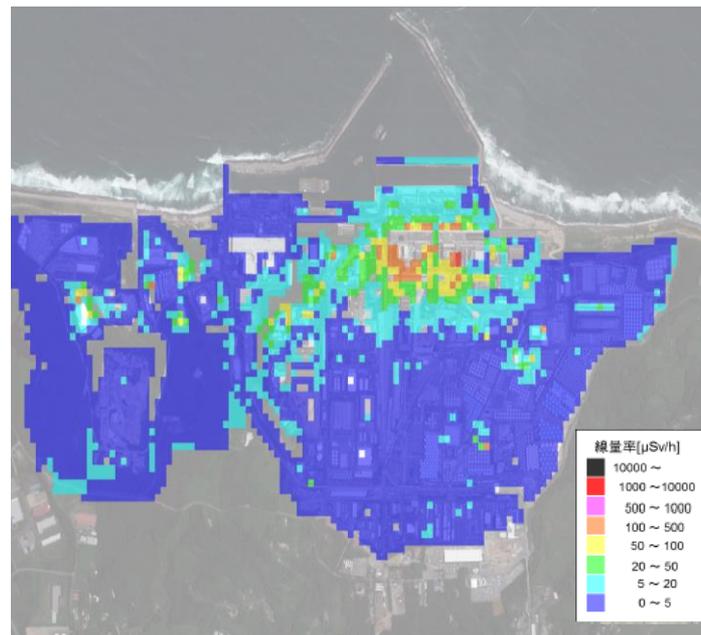
- 構内の環境改善によって、構内全域にわたって環境線量率が低下している。  
2020年度時点で、構内の約96%が全面マスク着用を不要とするエリアとなっている。

2014年度



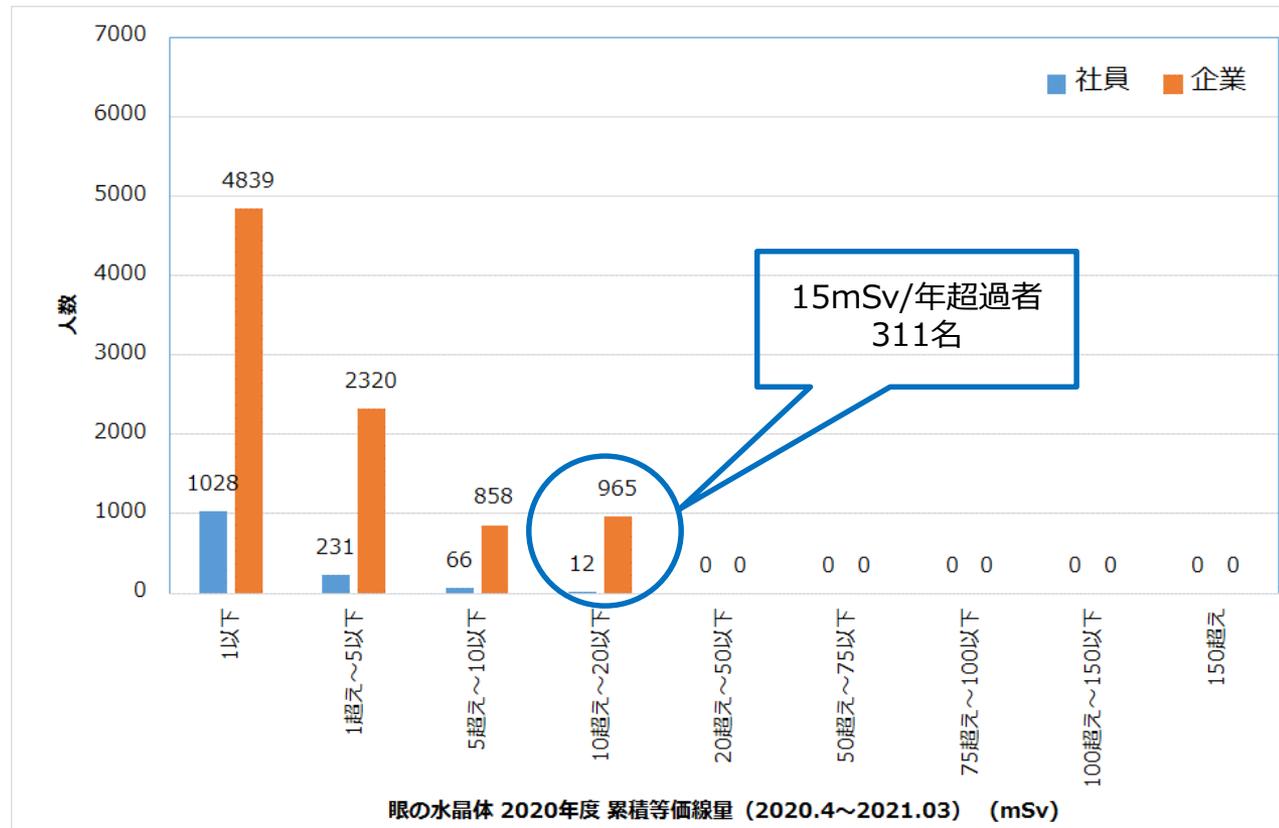
※ 空白部分は未測定エリア

2020年度



## ⑧眼の水晶体 累積等価線量分布（2020年度）

- 2020年度の眼の水晶体の最大線量は、20.00mSv。
- 眼の水晶体の等価線量が15mSv／年を超える作業を計画した段階、または超えたことが確認された段階で、眼の水晶体の等価線量を、眼の水晶体近傍（又は頭頸部）にて測定を開始しており、2020年度は311名の作業者が測定の対象となった。



## ⑨年度総実効線量の推移

- 総実効線量は年々低下しているものの、前年とほぼ同等で推移している。

